慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本漢学史上の句題詩
Sub Title	Sino-Japanese topic poetry (kudaishi) in the history of Chinese studies in Japan
Author	佐藤, 道生(Satō, Michio)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.4 (2020.) ,p.85- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	講演録
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20200329-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本漢学史上の句題詩

佐藤道生

はじめに

私がまだ文学部の学生だった頃、斯道文庫の太田次男先生が国文学Ⅲという科目を担当されていた。『本朝文粋』所収の漢文学作品をヲコト点（平安・鎌倉時代の訓点）に従って読むという授業である。太田先生は、授業の最初に必ず最近の関心事を一つ二つ話された。このマクラが非常に面白いもので、私は毎回それを楽しみにしていた。ある時、刊行されたばかりの神田喜一郎氏の著書『墨林閒話』（岩波書店、一九七七年）を紹介されたことがあった。先生は書中の「日本の漢文学」と題する論文（一九五九年刊行の『講座日本文学史』第十六巻所収の一篇）を我々学生に読むように勧められた。私はすぐにその論文を読んでみたが、学部の学生にはやや難解であったことを覚えている。

「日本の漢文学」は古代から近代に至る漢文学史であり、そこで神田氏は、日本の漢文学には国文学として捉えるべき面と中国文学の一支流として捉えるべき面とがあるが、自分は後者の、中国文学の基準によって日本の漢文学を評価する立場を取ると前置きして論を進めている。その第四節「平安朝の漢文学」では、菅原道真を始めとする平安前期の詩人たちが白居易をよく学んだことによって漢文学は隆盛に向かったが、後期に入ると、「せっかく白居易の詩に導かれて、自由に自己の思想や感情を表現するように向きかけてきた新傾向も、まったく挫折してしまい、一種のマンネリズムに陥って、時代の降るとともに、ますます低下していったと見るより仕方がない」と述べて、平安後期を漢文学の衰退期と位置づけている。神田氏が平安後期を「ほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった」と評した

のは、恐らく『本朝無題詩』を一読された印象ではないかと思う。

そのことは例えば次に掲げる藤原基俊の詩（『本朝無題詩』巻十）を読むと、良く分かる。藤原基俊は平安後期を代表する歌人の一人で、百人一首に収める秀歌「ちぎりおきしさせもが露をいのちにてあはれ今年の秋もいぬめり」の作者である。また基俊は当時、詩人としても名を馳せていた。この詩はその基俊が嘉保三年（一〇九六）三月十三日、数人の友人と連れ立って京都郊外の山寺、円融寺に遊び、その場で賦したものである。

暮春遊円融寺即事　　暮春　円融寺に遊ぶ即事

1春伴鴛鸞遊古寺　　春　鴛鸞に伴はれて古寺に遊ぶ
2煙霞深処感深衷　　煙霞深き処　深衷を感ず
3江南雨過青山近　　江南に雨過ぎて　青山近し
4野外花飛色界空　　野外に花飛びて　色界空なり
5五欲皆消観念暁　　五欲皆な消えぬ　観念の暁
6百年半暮自由中　　百年半ば暮れぬ　自らに由る中
7栄華従本非吾事　　栄華　本従り吾事に非ず
8命也何為老去躬　　命なり　何をか為さむ　老い去る躬

春の一日、殿上人に伴われて古寺に遊び、山深い中で感慨にふける。雨はもう桂川の南に過ぎ去り、山は青々と間近に見えている。桜の花が山野に飛散するのを見て、この美しい色界もやはり空なのだと悟った。この寺で弥陀仏のお姿を観想したおかげで五官による欲望を全て消し去ることができた。こうして自由気ままに過ごすうちに、我が人生も半ばを過ぎてしまった。立身出世など、もとより望んではいないが、年老いたこの身で何ができようか。これも運命なのだ。

基俊の詩は、当日の遊山を記録した『中右記』同日条[1]で「頗る華麗か」と絶賛されているが、第四句の「色界空」、

第五句の「五欲皆消」、第六句の「百年半暮」、第七句の「非吾事」、第八句の「老去躬」はそれぞれ白居易の詩句「臨高始見人寰小、対遠方知色界空」（2536登霊応臺北望）、「五欲已銷諸念息、世間無境可勾牽」（2911睡覚）、「忽々百年行欲半、茫々万事坐成空」（1059風雨晩泊）、「進退者誰非我事、世間寵辱常紛々」（3037詔下）、「病来心静一無思、老去身閑百不及」（2622斎月静居）に拠った表現である。ここには白居易の詩句をちゃっかり借用して一首を作り上げたという印象がある。

日本の漢文学を中国文学の支流と見なす立場からすれば、たしかにこのような詩に不満を感じるのは已むを得ないことである。太田先生も後に（私が大学院に進んでからのことだが）『本朝無題詩』には白居易の影響が随所に見られるけれども、その批判的精神が受け継がれることは無く、表面的な模倣に陥っている、と述べられていた。

しかし、右に見た藤原基俊の作品は、決して当時の日本人の漢詩を代表するものではない。白居易の受容を見ようとする時、この詩は、当時の日本漢詩のほんの僅かな側面しか表していないのである。実は平安中期、村上朝（十世紀半ば）を境にして、日本人の漢詩は中国文学の支流から抜け出て、方向転換の舵を大きく切っていた。その当時の日本には、中国唐代に形成された近体詩の規則に、日本独自の規則を加えて、中国文学の流れから大きく外れた漢詩が存在していた。それが標題に掲げた「句題詩」である。本稿では、この句題詩という文体の概要と特質とについて述べたいと思う。

一、句題詩とはどのような文体か

『毛詩』の大序に「詩者志之所之也。在心為志、発言為詩。情動於中、而形於言。」とあるように、詩は心に感じたことを言葉に表すものであるから、当然のことながら、時と処とを選ばずに作られる。しかし、現存する日本の平安時代の詩を見る限り、必ずしもそうではなかったことが分かる。当時の詩は宮中や貴族の邸宅などで開かれる詩宴の場で作られることが多く、しかも出席者たちは詩宴の主催者が定めた詩題にしたがって詩を作ることを常とした。これは古代の日本人が中国初唐に顕著に見られる君臣唱和の形式を手本として詩作のあり方を学んだ結果であると思わ

れる。詩は「志を言う」手段としてよりも、むしろ社交の道具として機能していたのである。それでは、詩宴ではどのような詩が作られていたのであろうか。

詩宴で出される詩題（当時は「題目」と言った）は早くから漢字五文字に定まる傾向にあり、これを特に「句題」と呼んだ。句題は出席者全員が共有できる主題、すなわち季節感や年中行事に関わる内容のものが求められた。詩宴に先立って、主催者から詩題の撰定を任された者を題者と言い、題者は中国の詩人の五言詩から一句を採って詩題とした。また、時代が下るにつれ、古句に準えて題者が詩題を新たに作るようになった。平安中期、一条朝頃までには、詩宴に向けて新たに作られた句題が一般的となっている。実例を示そう。

寛治四年（一〇九〇）四月十九日、時の堀河天皇（一〇七九―一一〇七）は父白河上皇（一〇五三―一一二九）の住む鳥羽殿に行幸し、その翌日、天皇主催の詩宴が開かれた。詩宴に招かれたのは大臣公卿五人、殿上人七人、儒者十人、文章生三人で、幸いこのときの詩二十三首を『中右記部類紙背漢詩集』に見ることができる。その中から当代を代表する詩人、大江匡房（一〇四一―一一一一）の詩を次に掲げよう。

松樹臨池水

1仙家池水正泓澄
2松樹臨来殊有情
3草聖帯煙残月暗
4波臣衣緑晩風清
5亜枝瀉色金塘裏
6密葉浸陰玉岸程
7勝地宸遊看不飽
8千秋万歳幾相迎

松樹　池水に臨む

仙家　池水　正に泓澄たり
松樹臨み来りて　殊に情有り
草聖　煙を帯びたり　残月暗し
波臣　緑を衣たり　晩風清し
亜枝　色を瀉く　金塘の裏
密葉　陰を浸す　玉岸の程
勝地　宸遊　看れども飽かず
千秋　万歳　幾たびか相ひ迎へむ

松が池のほとりに立っている。

上皇のお住まい（鳥羽殿）では、池水が広々と澄みわたっている。そのほとりには松が立っていて、この景色はまことに趣き深い。そのむかし草聖と称えられた後漢の張芝はこのような松生うる池のほとりで、月あかりもほの暗い中、ひたすら書の稽古に励んだのであろうか。いま魚は水面に映る松のみどりを着込んで、さわやかな夕風の吹きわたる池を泳ぎまわっている。低く垂れた松の枝は、堤のあたりでその緑を池水にそそいでいる。密に繁った松の葉は岸辺でその姿を池水にひたしている。堀河天皇と白河上皇とはこの見あきることのない仙境のような勝地を遊覧され、千年万年と尽きることのない松の如き遐齢をお迎えになられることであろう。

「松樹臨池水」という詩題（句題）には、松が常緑樹であることから、天子の齢を永遠なれと寿ぐ意図が籠められている。天皇と上皇とが臨席する詩宴であることを十分考慮に入れた詩題であると言えよう。句題は基本的に二つの事物を組み合わせた詩題である。題の中に二つの実字（名詞）が含まれている。この詩題であれば「松」と「水」（或いは「池」と見ても良い）とを組み合わせたものと分析できる。

当時、詩宴で用いられる詩体はこの例のように今体の七言律詩であった。それ故、詩人は押韻、平仄、頷聯・頸聯を対句とする等、今体詩の規則にしたがって詩を作ればよいのだが[2]、実は句題詩の場合、それに加えて日本独自に形作られた規則が存在した。

まず句題詩の首聯（第一句・第二句）では句題の五文字を全てこの中に詠み込まなければならない。なおかつ句題の文字は首聯以外で用いてはならない。作者の匡房は句題を上三字と下二字とに分け、下句のはじめに「松樹臨」を、上句の中ほどに「池水」を配置している。この首聯は、題目の文字を用いて直接的に題意を表現することから、「題目」と呼ばれた。

次に頷聯（第三句・第四句）・頸聯（第五句・第六句）では対句を用いて、各聯の上句（出句）、下句（落句）ごとに題意を婉曲に表現することが求められる。これを「破題」と呼んだ。破題の方法は基本的に言葉の置き換え（詩題の文字を別の言葉に置き換えること）であるが、このとき詩題の文字をそのまま用いてはならない。また、どちらかの聯では、中国の故事を用いて破題することが望ましく、その場合は「破題」と言わずに「本文」と言った。肝腎な

ことは、頷聯・頸聯において題意が都合四回繰り返して破題される点である。詩人のいちばんの腕の見せ所がこの頷聯・頸聯の破題である。試みに当時編纂された『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』、『和漢兼作集』といった秀句選を繙けば、句題詩の頷聯・頸聯からの摘句が圧倒的に多いことに気づくであろう。詩人たちは句題の実字を詠み落とすことなく、いかに巧みに破題するかという点に最も心を砕いたのである。この当時、詩人としての評価は、破題のための語彙をどれほど豊富に持っているか、それによって決まったと言っても言い過ぎではなかった。

この詩では頷聯が「本文」に当り、中国故事を用いて題意を敷衍している。上句の「草聖」とは草書に優れていた後漢の張芝のことで、彼には池を墨池に見立てて書の稽古に励んだという名高い逸話があった。『蒙求』の「伯英草聖」の古註に「後漢張芝、字伯英、善草書絶妙。時人謂曰、臨池学書、池水尽黒。韋誕曰、伯英草聖。（後漢の張芝、字は伯英、草書を善くすること絶妙なり。時人謂ひて曰はく、池に臨みて書を学ぶ、池水尽く黒し、と。韋誕曰はく、伯英は草聖なり、と。）」とある故事である。したがって「草聖」の語はこの故事を媒介にして句題の「臨池水」を言い換えたことになる。「帯煙」の「煙」は新緑がもやに煙ったように見えることを表す語で、これ一文字で「松」を表す。したがって第三句は「草聖帯煙」の四字で題意を満たしている。

下句の「波臣」の語は『荘子』外物篇に見える所謂「轍鮒の急」の故事によって、魚の異名として用いられるが、同時に、魚のすみかである「池水」を連想させる。したがって「波臣衣緑」（魚が緑の衣服を着る）というのは、松の緑が池に映ったさまを譬えた表現であり、これもまたこの四字で題意を言いおおせている。この二句一聯は故事を用いての破題、すなわち「本文」と言うことができる。

頸聯も「破題」に当たる。破題の方法が基本的に言葉の置き換えであることはすでに述べた。ここでは詩題の「松樹」を「亜枝」と「密葉」とに言い換え、詩題の「臨」を「瀉色」と「浸陰」とに言い換え、詩題の「池水」を「金塘裏」と「玉岸程」とに言い換えることによって題意を表現している。

一首のしめくくりが尾聯である。ここに至って詩人ははじめて自らの思いのたけを述べることが許される。それ故、この聯を「述懐」と呼んだ。しかしそれも題意をふまえての内容でなければならない。ここで匡房は「松樹」の常緑に関連づけて天子の長寿を予祝したのである。以上が句題詩の構成方法（構成上の規則）である。この例からも明ら

かなように、句題詩は終始題意に沿った詠み方が求められる。このような構成方法は村上天皇の時代（十世紀半ば）に生成され始め、一条天皇の時代（十世紀末から十一世紀初めにかけて）までには詩人たちの間に定着していたと思われる。

句題詩の規則が以上のように定められたことは日本漢学史上、まさに画期的な出来事であった。というのは、それまで詩を作ることは、漢学の素養のある少数の貴族にのみ許された、言わば特殊技能であった。ところが、構成上の規定が形作られたことによって、漢学の専門教育を受けていない一般の貴族であっても、容易に詩を作ることが可能となったのである。一見難しく感じられる構成方法も、頷聯・頸聯で句題の文字に対応させて詩句を作る「破題」の方法にある程度習熟すれば、簡単に詩を作ることができる。また、句題詩を作るための対句語彙集のようなものも次第に整備されていった。こうして句題詩は貴族社会に広く受け入れられ、詩の本流として位置づけられるようになったのである。

以上が、平安時代の句題詩の概略である。漢詩という中国伝来の文学様式でありながら、中国とは異なる日本独自の側面を持っていたことが理解してもらえたかと思う。句題詩は当時の日本漢詩の中心にあり、句題詩に対する理解無しに当時の漢文学を語ることはできない。

二、日本独自の意味を付与された詩語（一）「秦嶺」

この句題詩は、日本の古典文学の他のジャンル、例えば和歌の詠み方に影響を与え、また後代の連歌・聯句を生み出す母体となるなど、日本文学史上に果たした役割が極めて大きかったが、ここで見逃してはならないのが、この句題詩の中から、日本独自の意味や用法を持つ漢語が多く生み出されたという事実である。以下、この問題について触れてみたい。

中国の詩文に「秦嶺」という言葉が見られる。『文選』と『白氏文集』の用例を次に掲げたが、秦嶺はふつう長安の南方に位置する終南山を指す。『文選』の李善註が『漢書』を引いて、「秦嶺は南山なり」と説明するとおりである。

〔文選　巻一、西都賦、班固〕睎秦嶺眺北阜、挾灃灞據龍首。〔李善註〕秦嶺南山也。漢書曰、秦地有南山。
〔白居易、0594山石榴、寄元九〕商山秦嶺愁殺君、山石榴花紅夾路。
〔白居易、0669送武士曹帰蜀〕月宜秦嶺宿、春好蜀江行。
〔白居易、0863初貶官過望秦嶺。自此後詩江州路上作〕望秦嶺上迴頭立、無限秋風吹白鬚。
〔白居易、0908東南行一百韻〕秦嶺馳三駅、商山上二邗。

ところが、平安時代の句題詩には、終南山の意味に用いた「秦嶺」の用例は見当たらない。次に掲げるのは、『中右記部類紙背漢詩集』に収める「月是作松花」という詩題で作られた句題詩群である。

左衛門督源師房
団々漢月感相驚、況作松花色正明。秦嶺艶粧生夜漏、呉江濃淡任陰晴。
初開円影東昇夕、漸散清光西落程。一部楽章終曲後、更令墨客放詩情。
右中弁源資通
元来夜月得佳名、況作松花処々明。試折一枝風不馥、高望細葉露相瑩。
金波玉蕊呉江暁、皓色素葩秦嶺晴。為対蒼々雲外影、絃歌自為九成声。
東宮学士義忠
夏雲収尽月華生、松是作花望裏明。景色凝匂秦嶺夕、一千守瑞漢天晴。
煙開岸假陽春眼、緑白林欺麗日情。非啻青標素艶□。風枝更入管絃声。
中宮亮為善
夏天対月夢方驚、暗作松花四望明。秦嶺三更含暖露、呉江一夜遇春晴。
緑蘿変蔕出山後、翠蓋借葩渡漢程。池浪皎然雲未曙、叩舷乗興管絃清。
大学頭時棟

萱葉借粧鸞宿処、桂花分影鶴栖程。光添秦嶺春林艶、色発呉江暁岸栄。（首聯・尾聯を欠く）
　施薬院使為祐
開豈雨霑天暮後、落非風力日登程。粧迷秦嶺雲収色、匂誤呉江浪映声。（首聯・尾聯を欠く）
　弾正証弼定義
濃艶不芳秦嶺暁、攢枝有色漢天晴。光籠煙葉応装露、影照鶴翎欲代鶯。（首聯・尾聯を欠く）
　実範
碧宵斂靄何攸驚、月作松花望裏明。繞朶漢天新霽後、掃根秦嶺漸銜程。
雲膚隔蓋粧猶嬾、風力払梢色豈軽。請見池頭君子樹、芳栄遙契桂華生。
　実綱
夜月蒼々望裏生、松花是為桂華明。綻誰待雨呉江夕、開不因春秦嶺晴。
已似帰根光落処、漫如盈朶影斜程。今看深奥蓮華席、遺韻遙伝王舎城。
　左衛門権少尉明衡
蒼々夜月動心情、自作松花望裏明。枝假素葩匂不馥、梢欺玉蕊影空瑩。
開敷秦嶺雲収夕、凋落呉江霧暗程。偏仰　恩輝齢漸老、為憐潤底久含貞。
　文章得業生源親範
蒼々漢月向深更、自作松花只蕩情。百尺嵐晴寒艶潔、一林緑白暁光明。
新粧秦嶺開雲後、落蕊呉江照浪程。莫遵今宵佳色好、万年此地契芳栄。

これらの詩は長元七年（一〇三四）五月十六日、関白左大臣藤原頼通が自宅で詩宴を開いたときに作られたもので、詩題の「月是作松花」は「月明かりが庭の松を照らし、その白さのために松が花を咲かせたように見える」の意である。『中右記部類紙背漢詩集』には、この時の出席者二十三名の詩が見られるが、その中の十一名の詩に「秦嶺」の語（枠に囲って示した）が見える。この「秦嶺」の語が詩一首の中のどこに置かれているかと言うと、全て頷聯か頸聯か

である。つまり「秦嶺」は破題に用いられた詩語なのである。それでは、句題のどの文字を言い換えた言葉かというと、それは全て「松」を言い換えたものである。実はこの言い換えの背後には、『史記』秦始皇本紀に見える秦の始皇帝の故事が存在する[3]。

二十八年、乃遂上泰山、立石封祠祀。下、風雨暴至、休於樹下。因封其樹為五大夫。（二十八年、乃ち遂に泰山に上り、石を立て封じて祠祀す。下るとき、風雨暴かに至り、樹下に休む。因りて其の樹を封じて五大夫と為す。）

秦の始皇帝が泰山で封儀（封禪の儀の一部。封は天を、禪は地を祀る）を終えて、下山しようとしたところ、突然暴風雨に見舞われたけれども、樹下に避難して事無きを得た。そこで始皇帝はその樹木に五大夫の位を与えた、という名高い故事である。『史記』にはその樹木が何であったとも記されていないが、後漢の応劭の『漢官儀』に「秦始皇上封太山、逢疾風暴雨、頼得松樹。因復其道、封為大夫松也。」とあるように、それは松であったという伝承が早くから生れた。この故事を媒介にして、日本の平安時代には「秦嶺」は秦の始皇帝ゆかりの山であると認識され、松生うるところ、松の名所として詩に用いられるようになった。このように同じ「秦嶺」という言葉であっても、日本では中国と全く異なる新たな意味が付与されて使われるようになり、その一方で本来の意味では詩に詠まれなくなったのである[4]。

右に挙げた句題詩群の最初に位置する源師房詩の「秦嶺」の語を含む一句「秦嶺艶粧生夜漏」を試みに解釈すれば、「秦の始皇帝が訪れたという泰山では、五大夫の松も、夜になれば月明かりに照らされて、花を咲かせたかのような美しい粧いを凝らしている」ほどの句意になるかと思う。

三、日本独自の意味を付与された詩語（二）「玉山」「藍水」

もう一つ例を挙げよう。唐の杜甫に「九日藍田崔氏荘」と題する七言律詩がある。

老去悲秋強自寛、興来今日尽君歓。羞将短髪還吹帽、笑倩傍人為正冠。藍水遠従千澗落、玉山高並両峰寒。明年此会知誰健、醉把茱萸子細看。

この詩は平安時代の日本でも名高かったらしく、大江維時による唐詩の秀句選『千載佳句』に、その頸聯（傍線部）が収められている。問題となるのは、そこに見える「藍水」と「玉山」との対である。

玉山とは、長安の東南に位置し、美玉の産地として名高い藍田山のことで、藍水はその山に水源を発する河川の名称である。一方、平安時代の句題詩には「玉山」と「藍水」とを対に持つ詩句が数多く見出される。その二語を含む一聯を次に掲げよう。〔　〕内には書名、詩題、作者を示す。

〔本朝麗藻、唯以酒為家、具平親王〕戸牖梨花松葉裏、郷園藍水玉山程。
〔類聚句題抄、依酔忘天寒、藤原国成〕藍水応無氷冷思、玉山唯有雪消情。
〔中右記部類紙背漢詩集、再吹菊酒花、藤原経通〕佳色重浮藍水浪、濃香亦染玉山雲。
〔中右記部類紙背漢詩集、酔来晩見花、大江匡房〕藍水雲昏望雪思、玉山日落趁霞心。
〔中右記部類紙背漢詩集、酌酒対残菊、藤原師通〕玉山古岸月幽見、藍水下流霜薄臨。
〔中右記部類紙背漢詩集、酌酒対残菊、藤原知房〕秋雪纔留藍水浪、暁霜半砕玉山陰。
〔中右記部類紙背漢詩集、落花浮酒杯、藤原家仲〕藍水晩霞飄処湿、玉山春雪灑猶軽。
〔中右記部類紙背漢詩集、月明酒域中、藤原忠通〕皓色不空藍水外、清輝只在玉山頭。
〔中右記部類紙背漢詩集、月明酒域中、菅原清能〕玉山一酔空頽雪、藍水三滎只泛秋。

これらは全て対句を為していることから、七言律詩の頷聯か、或いは頸聯かである。どちらにしても破題しなければならない一聯である。詩題は様々であるが、題中に共通して見られる文字は「酒」か「酔」かであり、詩句の「玉山」と「藍水」とは、地名であると同時に、酒飲みの居る場所、酒に酔うのに恰好の場所といった意味がそこに籠め

られている。

本来「玉山」と「藍水」とは、杜甫の詩から窺われるように、美しい山水を想起させる地名であった。それが日本ではいつの頃からか、美味い酒を飲む場所の意味が付与されて用いられるようになったのである。それがいつのことなのか明確には分からないが、具平親王（九六四―一〇〇九）が「唯以酒為家（唯だ酒を以つて家と為すのみ）」と題する句題詩で「戸牖梨花松葉裏、郷園藍水玉山程。（戸牖は梨花松葉の裏、郷園は藍水玉山の程）」（『本朝麗藻』巻下）と賦したのがその早い用例と言える（この詩の場合、「藍水」と「玉山」とは句中対）。

どうしてそのような変化を遂げることになったのか。その理由を考えてみよう。「玉山」には藍田山の別名の他に、竹林七賢の一人である晉の嵇康（字は叔夜）を指して用いることがある。それは『世説新語』容止篇に、

嵇康、身長七尺八寸、風姿特秀。山公曰、嵇叔夜之為人也、巖巖若孤松之独立。其酔也、嵬峩若玉山之将崩。

（嵇康、身長（みのたけ）七尺八寸、風姿特に秀づ。山公曰はく、嵇叔夜の人と為りや、巖巖として孤松の独り立てるが若し。其の酔へるや、嵬峩（ぐわいが）として玉山の将に崩れむとするが若し。）

とあることに由来している。山濤が、酒に酔う嵇康の姿を見て、まるで崩れ落ちようとする玉山のようだと喩えたことから、後代の詩人は、酒飲みが酔いつぶれた様を「玉山崩」「玉山頹」などと表現するようになった。例えば唐の白居易が「藍田劉明府携酌相過、與皇甫郎中卯時同飲、酔後贈之。（藍田劉明府、酌を携へて相ひ過ぎる、皇甫郎中と卯時に同飲し、酔ひて後に之れを贈る）」（『白氏文集』巻六十四・3107、詩題は、藍田の県令劉氏が酒を携えて来訪したので、皇甫湜と三人で朝酒を飲み、酔って詩を贈った、の意）と題する詩の中で「玄晏舞狂烏帽落、藍田酔倒玉山頹。（玄晏舞狂して烏帽落つ、藍田酔倒して玉山頹る）」（玄晏先生（皇甫湜）は舞狂して帽子を落とし、藍田の劉氏は玉山が頽れ落ちるように酔いつぶれてしまった）と作ったのはその一例である。

そして白詩が流行した日本では、この「玉山」の意味がさらに転じて、実際の藍田山の意味と重なり合うことによって、酒を飲むに相応しい場所を表すことになったのである。一旦「玉山」にそのような意味が附加されると、「玉山」

と対を為す「藍水」の語もそれに引きずられて意味の同化現象を起こしたと考えられる。こうして「玉山」と「藍水」とは詩題の「酒」或いは「酔」という語を言い換える語として句題詩に詠まれるようになったのである。[5] これも「秦嶺」と同様に、日本独自の意味が付け加えられた漢語と言うことができよう。

試みに、右に掲げた用例中の大江匡房の「酔来晩見花詩」の「藍水雲昏望雪思、玉山日落趁霞心。（藍水　雲昏し雪を望まむとする思ひあり、玉山　日落つ　霞を趁はむとする心あり。）」を解釈してみると、「美酒の飲める藍水では、夕暮れになっても、雪のように白い花を眺めたいと思う。（嵇康のような）酒飲みの集う玉山では、日が落ちても、霞のように紅い花を追いかけたい気がする」ほどの句意になる。傍線を付して示したように、「玉山」及び「藍水」に、酒を飲むに相応しい場所とか酒飲みの居る場所とかいった意味を籠めなければ、詩題を破題したことにはならないことが理解できるであろう。尚、白居易の詩には「藍水」と「玉峯」とを対語にした用例が多い。無論そこには「酒」や「酔」の意味は籠められていない。

四、結語

以上、本稿では、①日本の平安時代には句題詩という文体が流行したこと。②それを境にして日本漢詩は中国文学の流れから逸脱して、独自路線を歩み始めたこと。そして、③句題詩を源泉として、新たな漢語（これは後に和習と呼ばれるものを多く含んでいる）が生み出されたことを述べた。御教示、御批判をいただければ幸いである。

注

（1）『中右記』嘉保三年三月十三日条を次に掲げる。『中右記』は中御門右大臣と呼ばれた藤原宗忠（一〇六二―一一四一）の日記。

人々両三輩、可尋残花之由有芳約。仍巳時許先行向蔵人少納言成宗宅、門前相伴同車。次相伴前左衛門佐基俊、又同車。此後雖相伴、人々皆以故障。次行左大弁門前。而雑人成市、門前見証。驚尋之処、若公達今有闘雞之遊。仍空過了。招出前

摂州敦宗、又相具了。招蔵人弁時範、同来了。行向円融院、欲尋残花。雖相招式部丞蔵人宗仲、禁中依無人数、不能退出者。又行向前兵衛佐長忠門前、頻雖相招、乍在家被隠了。頗遺恨歟。午時許行向円融院南廊、見残花。于時仏閣漸荒、禅庭花残。懐旧之涙自霑行衣。人々為賦一絶、句題無題僉議之間、天景漸傾、已及申時。可賦無題之由、議了間、右京権大夫敦基朝臣、同舎弟図書助敦光、給料令明来会。人々感歎、披手筥破子、聊以杯酌。月前詩成。講之以図書助為講師。各以優美也。前金吾詩頗華麗歟。及深更帰洛。

（人々両三輩、残花を尋ぬ可きの由　芳約有り。仍りて巳の時許り、先づ蔵人少納言成宗の宅に行き向かひ、門前に相ひ伴ひて同車す。次いで前左衛門佐基俊を相ひ伴ひて、又た同車す。此の後相ひ伴はむとすと雖も、人々皆な以て故障あり。次いで左大弁の門前に行く。而るに雑人　市を成し、門前に見証あり。驚き尋ぬるの処、若公達　今闘鶏の遊び有り。仍りて空しく過ぎ了んぬ。前摂州敦宗を招き出だし、又た相ひ具し了んぬ。蔵人弁時範を招くに、同じく来たり了んぬ。円融院に行き向かひ、残花を尋ねむと欲す。式部丞蔵人宗仲を相ひ招くと雖も、禁中　人数無きに依りて、退出する能はず者。又た前兵衛佐長忠の門前に行き向かひ、頻りに相ひ招くと雖も、家に在り乍ら隠れられ了んぬ。頗る遺恨か。午の時許り円融院の南廊に行き向かひ、残花を見る。時に仏閣漸くに荒れて、禅庭に花残る。懐旧の涙　自ら行衣を霑ほす。人々　一絶を賦せむが為めに、句題・無題僉議するの間、天景漸くに傾き、已に申の時に及ぶ。無題を賦す可きの由、議し了んぬる間、右京権大夫敦基朝臣、同舎弟図書助敦光、給料令明来会す。人々感歎し、手筥破子を披き、聊か以て杯酌す。月前に詩成る。之れを講ずるに図書助を以て講師と為す。各おの以て優美なり。前金吾の詩　頗る華麗か。深更に及びて帰洛す。）

花見に参加したのは、右中弁藤原宗忠（三十五歳）、蔵人少納言源成宗、前左衛門佐藤原基俊（四十二歳）、前摂津守藤原敦宗（五十五歳）、蔵人右少弁平時範（四十三歳）、右京権大夫藤原敦基（五十一歳）、図書助藤原敦光（三十四歳）、給料学生藤原令明（二十三歳）の八名であった。この時の作と思われる敦基、敦宗、敦光、基俊の作が『本朝無題詩』巻十に現存する。

（2）この詩の脚韻は「澄」「迎」（下平声十二庚韻）、「情」「清」「程」（下平声十四清韻）であり、庚韻と清韻とは同用されるので、押韻に問題は無い。平仄は左に図示したとおりである（○が平声、●が仄声、◎が韻字であることを表わす）。二四不同、二六対、避下三連の原則を守っており、粘法にも適っている。

1○○○●●○◎
2○●○○○●◎
3●●●○○●●

4 ○○●●●○◎
5 ●○●●○○●
6 ●●●○●●◎
7 ●●○○●●●
8 ○○●●●○◎

（3）詩題（句題）の「松」を言うために秦始皇帝の泰山の故事を用いることは、拙稿「詩序と句題詩」、「『擲金抄』解題」（『平安後期日本漢文学の研究』、笠間書院、二〇〇三年五月。初出はともに一九九八年十月）に指摘した。併せて参照されたい。

（4）『和漢朗詠集』管絃（462）に、唐の公乗億の「連昌宮賦」からの摘句「一声鳳管、秋驚秦嶺之雲、数拍霓裳、暁送緱山之月。（一声の鳳管は、秋　秦嶺の雲を驚かす、数拍の霓裳は、暁　緱山の月を送る。）」が収められている。ここに見える「秦嶺」は言うまでもなく長安南方の終南山を指している。ところが、平安末期に成立した釈信救による『和漢朗詠集』の注釈書『和漢朗詠集私註』では「秦嶺」に対して「史記云、秦始皇昇泰山、頌秦徳。（史記に云ふ、秦の始皇、泰山に昇り、秦徳を頌す。）」と注を加えている。信救は儒者（専門の漢学者）ではないので、これが当時の一般的な解釈であったとは断言できないが、すでに「秦嶺」を泰山と誤って解釈する下地の出来上がっていたことが窺われよう。

（5）同様の主旨は、拙稿「四韻と絶句」（『句題詩論考』、勉誠出版、二〇一六年十一月。初出は二〇一四年十二月）に述べたことがある。

〔附記〕本稿は、二〇一九年七月十三日に慶應義塾大学日吉キャンパスで開かれた慶應義塾中国文学会第四回大会に於ける同題の講演に基づくものである。